

## 答辞

教室の窓から望む金華山に混ざり始めた仄かな淡い緑色や、カーテンを揺らす風のやわらかさに、終わりと、始まりを予感させる季節となりました。

今日は、私達のために、このような式典を執り行って下さり、誠にありがとうございます。また、来賓の皆様、保護者の皆様におかれましては、ご多用の中ご臨席賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

いつまでも、いつまでも続いていくような気がしていた高校3年間は、気が付けば、あっという間に終わっていました。私たち長良高校七十五期生は、中学時代から、新型コロナウイルスと共にあった世代です。「高校ではきっと…、何とか今まで通り…」そんな希望は、残念ながら完全には叶いませんでした。オンライン授業に、いつまで経っても外せないマスク。変わる事のない生活に、苦しんだ時期もありました。

苦しい時、型にハマった笑顔で本心を覆い隠し、「良い子」でいるのが、世間でよく言う、「大人になる」ということなのかもしれません。私たちが一年生だったあの頃で言えば…、文化祭なんてやらない。集まらない。おとなしく、ただ勉強していればいい。それが、あの時世間が私たちに示した、模範的な生き方でした。

…けれど、長良高校は違いました。今まで通りでなくたって、やれることを全力でやろう。そんな気概を持って行われた「オンライン文化祭」。企画して、成し遂げたカッコいい先輩たちに、それを全力で支え、後押ししてくれたカッコいい本当の「大人」たち。言葉だけじゃない、開拓者の気魄が、そこにありました。

そんな長良高校での日々は、行事も、日常生活も、決して忘れられません。全校では集まれないからと言って、学年ごとに行った球技大会。長崎ではない修学旅行。前を向いて黙って食べる昼ご飯、そんな中でも、アイコンタクトで通じ合った友人たち。型通りの青春でなくとも、私たちの青春は、確かにそこにありました。

今まで通りのことが、出来なくたっていい。世界が変わらないのなら、自分たちが変わればよいのだと、私はこの長良高校で学んできました。私たちは、何者にでもなれるのだから。

そして、自分が変われば、世界は変わる。それを一番実感したのは、私にとって、いえ、私たち多くの長良高生にとって、やはり部活動でしょう。

私は入学当初、部活動に入る気はありませんでした。特段未来へのビジョンもなく、強いて言えば、一人で趣味のギターでも弾いて、適当に放課後を過ごすつもりでした。学校なんて好きじゃないし、親にだって反発したい。どこにでもいる、思春期の少年でした。今となっては、そんな自分が何故演劇部に入ったのか、理由も忘れてしまいました。

けれども…、いつの間にか、私は本気になっていました。そして自分が本気になった時、全力で支えてくれる人がいました。自分の想いに、全力で応えてくれる仲間がいました。そうした存在に、気づくことが出来るようになった自分がいました。全力を傾ける日々を、楽しんでいる自分がいました。

県で一番の賞をいただいた時、全国大会への切符を手にした時。一緒に泣いてくれた仲間と親。心からのお祝いの言葉をくれた友人たち。ホンモノの人間関係を築くことが出来ていました。誰もが、何にでもなれる可能性を秘めている。自分が変われば、世界は変わる！

三年生の秋には、生徒会長として、長良祭の完全復活を目指しました。華やかな文化祭の影には、こんなにもやることあるのかと、苦勞の毎日でした。支えて下さる先生方や、生徒会執行部のメンバーへの、感謝の念に溢れました。後輩の皆さん、来年以降もぜひ、皆さんの個性を活かして、更なる発展を目指してください。

文化祭が終わると、本格的に受験に向けて動き出しました。学力向上に励むと同時に、自分と正面から向き合いました。自分は何をしたいのだろう。自分には何ができるのだろう。全くつかめず、悩む日々でした。

そんな中、傍にいてくれたのは友人たちでした。悩みを分かち合える存在が、どれだけ支えになったことか。この場を借りて、感謝の言葉を伝えたいです。本当に、ありがとうございます。

そして、親身にご指導くださった先生方。小論文も面接も、毎日遅くまで時間を割いて、丁寧に指導下さりありがとうございます。本当に尊敬でき、心から恩師といえる先生方と、この学校で出会うことができました。

最後に両親へ。困った時、いつも話を聴いてくれてありがとうございます。いつも、見守ってくれて、ありがとうございます。

在校生の皆さん、卒業まではあとという間です。悔いのない毎日を過ごして下さい。

私は今、「あの時、一人でギターを弾いている高校生活を選ばなくてよかった」と、心から思っています。技術は、これから先の人生でも身に付きますが、この時期にしか蓄えられない音色やフレーズが、山ほどあるはず。その音色を共に味わえる、そのフレーズを共に楽しむ、そんな仲間と出会えた場所が、私にとっての、「長良高校」でした。

私たちは今日、この居心地の良い学び舎を去りますが、これから先も、長良高校で身につけた開拓者の気魄と、豊かな感性を携えて、未来を、切り拓いていきます。

最後に、母校、長良高等学校の更なる発展と皆様のご多幸を願い、答辞と致します。

令和六年三月一日  
卒業生代表 長岡優騎